

山之内兼光▼野田の笛▼水谷浩水。

七月四日(日)昼一時東京新宿洲會館、主催日本琵琶協会の(有料)。教盛▼田中彩水▼壇の浦▼篠内旭須美▼新選組丸田穂容▼小督▼吉田央舟▼北の庄▼内田旭章▼羅生門▼彼ノ矢洲友▼講評▼国立音楽大学郡司すみ先生。

本淳水▼竜の口▼花俣圭水▼茨木▼中谷裏水。京都琵琶協会七月例会 七月十一日(日)本部平井会長宅。(次号詳報) 京都琵琶協会一泊懇親会 七月十六、七日須磨荘。(次号詳報) 京都琵琶協会八坂神社献奏会 七月二十三日(金)京都琵琶協会協賛券号詳報 静岡一泊弾交會 七月二十五、六日三楽荘温泉。(次号詳報)

ラジオ琵琶放送

○六月二十四日(木)午後三時五分NHK・FM「今日の邦楽」で「那須与市」を押川旭葉女史。(三十分) ○六月二十五日(金)同右「NHK邦楽新人オーディション合格者の演奏」で「しぐれ曾我」を水藤桜子女史。(十五分) ○七月八日(木)同「今日の邦楽」で「石重丸」を木原綾子女史。(三十分)

予告

一水会城東支部演奏大会 七月十一日(日)昼二時東京上野本牧亭、後援一水会本部。(有料)。吉野落▼村井栄水▼桜狩▼高橋訓水▼常陸丸▼洪谷劔水▼城山▼山田源水▼彰義隊▼時田揮水▼月下の陣▼岡田彰水▼西郷隆盛▼日比二水▼小栗栖▼松尾昭水▼霧の川▼中島▼谷津豊水▼敦盛▼石崎麗水▼須磨の春▼矢内皆水▼天目山▼山川縹水▼高松城▼松本諸水▼國のしずめ▼関恵水▼別れの盃▼関口発水▼姿三四郎▼佐藤米水▼羽衣▼荻野甲水▼勸進帳▼宮原暉水▼(以下本部助演)小野訓導▼座間櫻水▼本能寺▼杉

○京都琵琶協会八月例会 八月二十一日(日)午後二時本部平井会長宅。 ○邦楽誌「まつり木原綾子演奏会」 九月五日(日)十一時東京茅場町東京証券ホール。 ○塚開神社秋季大祭に琵琶献奏会 九月十五日(水)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。 ○日本琵琶協会の第十九回コンクール 九月二十六日(日)十一時東京銀座ガスホール。 ○京都琵琶協会秋季演奏大会 十月十六日(土)昼京都商工会議所ホール。

暑中御見舞

日琵琶協関西支部顧問 京都琵琶協会顧問 錦心流琵琶 植村 實 水

あがき

雨の少ない梅雨期も過ぎて盛夏八月を迎える。これから一ヶ月あまりは炎暑と戦わねばならぬ。三十七年前の八月には六日広島、九日長崎に原爆、十五日終戦と、何とも思い出の悪い月である。いま全世界の核兵器貯蔵量は五万個あるという、不幸にして若し全面核戦争が起れば瞬時に何億の人命が失われ琵琶どころではない。恐ろしいことである。本号暑中交礼の御協賛を沢山頂いて感謝している。一応お申し込みの順に掲載したが万一不備の点があればどうか御寛容願いたい。なお郵便物の配達がおくれているので本号締切後に到着した分は勝手ながら九月号に残暑見舞として載せさせて頂くから併せて御了承下さい。予定していた二、三の有意義な記事が御執筆の先生方には誠に申し訳ないが紙面の都合で割愛の止むなきに至った。次号を御期待乞う。

昭和五十七年八月一日発行(非売品) 編集者 植村 實 社 水 発行所 京 植 村 實 社 水 〒565 吹田市山田東一丁目三十一番四号 電話 〇六(八七五)〇三二六番

琵琶 機関紙

京

結

第三三八号 京 絃 社

おんなの都 (七)

落合一誠



天下の富と権力を掌中にしたばかりか、朝鮮半島から明國に至るまで版図を広げようとしたさしもの太閤秀吉も、その野望ついで、慶長三年八月になると病こうじて全く氣弱になつてしまつた。そこで家康や前田利家など五人の大名に、

返す返す秀頼の事のみ申し候、五人の衆頼み申すべく候、委細五人の者に申し渡し候、名残り惜しく候。(現代文に訳)。

と遺書にも等しい手紙を渡して、ただひたすら幼い秀頼の行く末を案じている。兎に角自分亡きあと、はたして豊臣家は安泰であらうか。折角築き上げた豊臣家の繁栄を、忽ち群狼のようなやからに食い荒され、何の力もない秀頼は無惨に打ち殺されてしまうのではなかるうか。

それを思うと秀吉は居ても立ってもおられず、四方八方に頭を下げて頼みたいほど不安

になつてくる。それと云うのも、老年性結核が進行して死期が迫つていたためである。だが、天下人ともある秀吉が、涙を浮かべて家康たちに頭を下げて、何度も誓書を取り交し、それでも安心出来なくて苦しみつゝ、遂に八月十八日六十三歳で他界した。

露と落ち露と消えにしわが身かな 浪花のことは夢のまた夢 黄金の茶室を作り、美女に取囲まれて豪しやを極めた秀吉にしてこの通りである。伏見城で永眠した秀吉の菩提を弔うため正室おねの方には、京都高台院に引こもつて念仏三昧の生活に入つた。

一方、淀君は豊臣家の幼主となつた秀頼と共に大阪城に入つて、秀吉の残した富と権力をそっくり受け継いだ。そのため正室と側室の地位が全く逆転してしまつた。淀君は北政所(正室)に打ち勝ち、女の戦の勝利者となつたものと云つてよい。もう天下に恐いもの

は何一つない。これから私の天下が開けるのだ。秀吉を愛していたとは決して云えない淀君は、きつとそう思つたに違いない。 そんな彼女にとつて頼もしい家臣は石田三成であり、好ましい話相手は美男のほまれ高い大野治長であつた。そのため秀頼の本當の父親は、子種のない老人の秀吉であるう筈がなく、きつと大野の子供に違いないという噂が広まつた。

まだ三十三歳の女盛りで、孤園を守れというのは矢張り無理かも知れない。しかし石田と大野が淀君の傍らに侍しているため、忠臣の加藤清正、福島正則などは、淀君を毛ぎらいつて全く寄りつかなくなつてしまつた。

また天下をねらう徳川家康は、高台院で静かに念仏を唱えている北政所の生き方を尊敬して、淀君の我儘ぶりに眉をひそめていた。斯くして慶長五年(一六〇〇)、家康は豊臣家を滅ぼすべく、石田三成の挙兵を巧みに誘つて、天下分け目の関ヶ原で雌雄を決することになつた。しかし石田は破れて家康が征夷大將軍の位についた。こうなると淀君は治まらぬ。あくまで家康を豊臣の家臣として見ようとする淀君は、余りにも天下の形勢を知らぬ過ぎた。

秀頼を懐柔するため家康は、孫娘千姫を大阪へ送つて秀頼の妻としておいて、着々と実力をたくわえていった。 千姫は、淀君の妹と徳川秀忠の間に生まれ淀君の姪にあたる。だが淀君は、徳川のスパ



五絃閑話

水藤五朗

著作権(二)

イかも知れないと疑っているため、秀頼の妻とは名目だけで寝室を共にさせなかつたらしく、遂に最後まで千姫は処女であったという。さて、將軍となつて天下の実権を握つた家康は、秀頼に上洛して挨拶に来たれという。淀君は非常に怒つて、秀頼を殺し自分も自害すると云い出した。

しかもこの時、家康の使者として大阪城へ来たのが高台院、秀吉の正妻であつたので一層淀君を怒らせた。かつては正妻のおねねに全く頭が上がらず、口惜しい思いをしてきた自分が、今度は豊臣家の女主人として高台院を迎えたので、勝ち気一方の淀君はるくに返事もしなかつた。

家康は、秀頼が挨拶に来れば一大名として待遇するつもりであつたが、来ないので遂に秀頼を見限つた。そして大阪城の軍用金を浪費させるため、秀頼に多くの寺院を建立させ、方広寺の鐘の銘「國家安康」に難くせをつけて、強引に合戦に持ち込んだ。そして夏の陣で敗れて淀君は、天主閣に火を放ち、秀頼と共に自刃して果てた。思えば、父長政、母小谷の方と同じ運命を辿つたもので、淀君四十九歳、秀頼は二十三歳であつた。(元)

(次号から「皇妹和宮」を連載)



著作権法の目的の一つは、著作者と著作物の保護である、と云う。琵琶に付いて話をすずめてゆくと、こうである。著作者は作詞者、作曲者、著作物はその作品、即ち、琵琶の曲である。このことから考えて、今日の琵琶、いや、今後の琵琶の世界に於いて、著作権の目的は果たして達せられるのであろうか、又達せられないとしたら、一般社会とはどういう関係が生じてくるのであろうか？ 琵琶を社会の中に生き続けさせる為には一考しなればならない問題であると思ふ。

琵琶会で題名と演者のみの表記でつまされてあるプログラムは多い。この場合、紙面の広さの都合もあつて「作詞、作曲者名は割愛させていただきます」と云う一文が記されているものもある。勿論この断り書きが割愛の正当性に、そのまま結びつくものではない。がプログラムの紙面上どうしてもやむを得ないことを補足説明する効果はあるのだから、やはり主権者は考えるべきなのではないだろうか。又、プログラムの表記で目立つことがあつたら、それは作詞者名のみを意味するのだから時折あるのだ。これは何を意味するのだからか。作詞があつて作曲があり、そして曲が成り立つのであるのに、この作曲者名がないのである。これは何を考へてのことだろうか。私には判らない。勿論、錦心流の会に見られるこの傾向は、作曲は永田錦心にきまつていると云う意味から生まれたものかも知れないが、現実には、錦心作曲と表記されることが少なくつては、昨今であり、それ以上に、作詞を記すのであれば、やはり作曲も記す義務も生ずるのであり、始めて会場を訪れる琵琶を知らない人のためにも、作詞者と作曲者の併記は必要であると思ふ。

ムを見ると、一体、プログラムとは、人の前で芸を演ずる心の準備とは、なんなのだろうかと深く考へてしまふ事もある。有料だから作詞・作曲の名を記し、無料であれば、どうでも良いと云うのは、根本的な点で誤りがある。入場料の有・無に関係なく、プロ・アマにも関係なく、演ずる作品の創作の名を表記することは必要なのである。多くの場合、プログラムを作成するのは演者であるゆゑ、演者の名を表記しないことはまず無い、が、もし、作者・作曲者の側に立つてプログラムを作成することになれば、演者の表記がないことも時には出ることになる。演者にとつては不満である。つまり、無表記はいづれの側にとつても好ましくないものであるから、更には、客席の側にとつても、その入場料の有無に関係なく、不便なのであるから、表記については神経を配るべきものと私は思う。この様な演奏会プログラムでの表記等が著作権認識のバロメーターになるのであれば、模範となるべきプログラム作りが多くなされてゆく事が大切であり、それと同時に、プログラム作りでの著作者表記の啓蒙が琵琶人間に広がってゆかなければならないと云える。ただ、こゝで注意をしなければならぬ事は、作詞・作曲者の表記が正しいものであり、その表記に対する充分な責任の所存があることである。それには何百曲と思われる琵琶作品の整理が望まれるのであつて各流、及び個人によつて演じられてゐる作品を網羅統一し、通覧出来

る書物―歌詞集―が一刻も早く作成されるべきなのである。資料として残り得る歌詞本が少くないのが現実の琵琶界である。琵琶歌本の必要性は、著作者保護の観点からばかりでなく、琵琶を聴く人々の側から生まれてもいる。即ち、琵琶歌を詳細に承知して、聴く時に、更に深い理解を得て琵琶を鑑賞したいとの望みからである。これは落語の速記本が作られるのと相通するのである。この様な聴き手の希望や、著作者の正しい認識と表記を実現する為の歌詞本作成とは別に、パーソナルコンピュータを利用するものも今後の新しい方法でもある。つまり、コンピュータに琵琶歌を記録して、僅か乍らも創られる新作琵琶歌と、古典作品との接点をチェックして、眞の創作をすすめてゆくのである。

元的に統制され、挙げてこの制限のもとに置かれることとなつた。広島県でも、昭和十七年五月ごろには企業整備令の発動から、一般商業は自由に開業不可能となり、小売業者にも大きく響いて、大半は単なる配給労働者に転落した。翌十八年に入つて、広島県内の一般工場は閉鎖又は軍需品製産工場に転化、十九年には建造物の疎開に始まつて街は一層衰微し、七月になつてマリアナ基地が完全に連合軍の手落ちたため、日本本土への空襲は本格的となり、十二月九日午前一時半、大阪の三宅と瓜破上空にB29一機飛来爆撃、これが今次の大戦で日本が受けた最初の空爆であつた。物資の配給は益々窮屈になり、特に主食類は各県市とも自給自足の態勢をとり、燃料の不足はまづ銭湯に現れて三日置きの営業となり、隣組では雑木伐採隊を組織して、休業しないように山の雑木を買い燃料とした。



恨みは深し―原子爆弾

広島

辻 旭城

昭和二十年春はこういう状況のうちに迎へられ、神社に参詣する人々は、男子は國民服に巻脚絆で鉄兜を負い、女子は木綿半袖の着物にモンペ姿であつた。

八月六日午前八時十五分、広島市立の公園を北へ抜けた相生橋附近に、米空軍の原子爆弾が投下され、一瞬にして広島市の大半を壊滅してしまつた。翌七日の新聞には、目を覆わしめる悲惨な地獄写真が載せられた。被害焼失面積は約四百万坪、家屋全焼五万六千戸、全壊六万八千戸、半壊三千七百戸。死者二十六

八月六日午前八時十五分、広島市立の公園を北へ抜けた相生橋附近に、米空軍の原子爆弾が投下され、一瞬にして広島市の大半を壊滅してしまつた。翌七日の新聞には、目を覆わしめる悲惨な地獄写真が載せられた。被害焼失面積は約四百万坪、家屋全焼五万六千戸、全壊六万八千戸、半壊三千七百戸。死者二十六

万人、傷者並びに行方不明者十六万三千人、
國鉄私鉄や電話、電気、瓦斯、水道全部スト
ップと報じた。

筆者は、空襲による災害が如何に恐ろしい
ものであるかを感じると共に、ビル窓硝子
が雨霰と飛び注ぎ、多数の被災者を出したこ
とに大きな哀しさを覚え、数年を経た初夏
ころ悲劇の広島市を訪ねた。広島駅からタ
クシーで平和記念公園に向った。公園附近には
犠牲者の慰霊碑と平和記念館・原爆資料館・
原爆の子像などが建てられていた。まづ「嵐
の中の母子像」の悲愴な姿をしたブロンズ
像を見て、涙しながら平和記念資料館に入場
した。

数千度にも及ぶ熱線に変化した屋根瓦の突
物や、焼けただれた身体にボロ布と化した衣
服を引きづりながら、水を求め、肉親を求め
てさまよう人々の生ま生ましい写真が展示さ
れている。話として何度となく聞いているが
これらを見て改めて一つの実感に心打たれた。
折り返りから修学旅行の中学生の団が入場し
て来た。「八重子さん見て御覧、気持ちの悪
いこの写真……」あたり憚らず大声で話
し合っている。これも世代の違いか。

資料館を出ると、数十羽の鳩が群がる公園
の中心地に原爆慰霊碑がある。ここには原爆
犠牲者の過去帳が納められ、碑の前には「安
らかに眠って下さい、あやまちは再び繰返し
ませんから」と刻まれている。
「原爆の子の像」に、無数に垂れ下った折

鶴は、あの悲しいエピソードを思い出させる。
二歳のときに原爆のせん光を浴び、六年生に
なって発病した一人の少女が、原爆病院に入
院しているうちに、受持ちの先生が見舞に來
て、「折鶴を千羽折れば病気が治ると聞きま
した、あなたも折って下さい、生徒にも勧め
ますから。」と話して帰ったのを信じて折り
はじめた。真心のこもった同級生のと合せて
九百六十四羽の折鶴が出来たところで遂に帰
らぬ人となった。

「原爆の子の像」はそのとき、同級生たちの
提案で生まれたものであるという。
「ピカドン」の悲劇があつてから三十数年、
現在の広島は全国でも屈指のモダンな街にな
っている。広々とした美しい大通り、活気に
満ちた繁華街、白いビルの林立、緑の多い公
園。そしてお城も復元されて、この町の由来
を教えてくれている。

四 絃 漫 筆

島津 天嶺



(十二) 琵琶を聴いて(1)
田舎に住んでいる私は琵琶を聴く機会が少
ないので、NHK・FMやテレビの琵琶に関
する番組は残らず聴きたいと思つているが、

新聞の予告欄を見落すこともある。本誌の予
告欄が充実することを切望している。
ラヂオ・テレビ以外の「生の琵琶」は自分
も出演する演奏会に出演される方々のを聴く
程度、六月十三日に東京で開かれた日本琵琶
楽協会の辻先生追悼演奏会を聴けたのは例外
的な事であった。

このように私の聴く琵琶の範囲はごく限ら
れたものであるが、これらの琵琶を聴いて、
いろいろ考えさせられることもある。
しかし私も時々公開演奏会にも顔を出すの
で、いわば「ノンプロ」、他の先生方のこと
を筆に載せて批評することは当然差し控えね
ばならぬ、弾奏家が評論家を兼ねることは、
やはり「御法度」であろう。

しかし演奏家の芸能力や演出力以外の歌詞
とか文字の読み方とか、いわば一般的なもの
の方に共通するようなことについて意見を述
べることは差支えないように思っている。
こんなことから二、三感じていることを書
いて見たい。

そのひとつ。いつも申し上げているように
最近演奏時間が制限されるので、往年の名曲
に手を入れて歌う場合が多くなつてはいるが、
そのやり方によっては大変なことが起る
ことがある。

この一例は本年一月二十一日NHK・FM
で放送された平山万佐子師の「川中島」であ
る。私の録音から記録したので或は間違つて
いるところもあるかも知れないが、この歌詞

は次の通りであった。

「天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、上杉
謙信は八千余騎を引き具して武田信玄を打
たんとて川中島に打つて出づ。破破るとき
の声、どつとあげつつ攻めかかる。
越後の勢退けば甲斐の軍これを追ひ、甲斐
の軍退けば越後の勢またこれを追う。
兵を合すること十七度、いづれを勝ちと白
真弓、引くかと思へし信玄が流れを乱して
走るところを謙信只一騎、赤栗毛のたくま
しきに鞭をあげ(中略・原曲と全く同じ。)
と歌いし如く二の太刀は早や肩先に切りこ
みぬ。

謙信もおも追ひすが、このひまに信玄は
虎口を逃れ去りにけり。(以下略)――
演奏を聴いているときは、それほど強く感
じなかったが、このように文字にして見る
と筋が通っていないことがよくわかる。
第一に、どつとあげつつ攻めかかったのは
前文から見れば越後勢であろう。それが越後の
勢退けばと早や退却している。少し屁理屈か
も知れないが甲斐の軍退けばと順序を入れか
える方がベターであろう。
次は引くかと思へし信玄が何をするかと思
つたら又流れを乱してひいてゆくことは何と
もおかしい。御承知のように原作では引くか
と思へし信玄が一手の勢の旗を伏せと武田方
の逆襲があつて、それを又宇佐美定行の上杉
勢が反撃して武田勢を追い落す、そこで信玄
が流れを乱して走るのであるが、この中途を

すっかり省略して――省略することは差支え
ないが――最初の引くかと思へしという章句
を残したから、全くわけのわからぬ文章にな
つてはいる。

最後に謙信もおも追ひすがというくだり、
追ひすがつたからには切りつけるかと思つと、
このひまに信玄は逃げてしまふ、追ひすが
ことと逃げることは全く無関係なのである。
琵琶歌は叙事詩であるから、たとえ短い曲
であつても筋が通っていないわけにはいかない。
このような変な琵琶歌が最も公開性の高いN
HKの放送で「まかり通つている」ことに私
は疑問を感じている。

なお吉水師のこの川中島の曲はその素材と
い、美しい章句とい、立派な文芸作品であ
る。それだけにその改作については慎重でな
ければならぬ。東京の正絃会の方が歌つてい
る省略法についても聴いて何かおかし
と感じているが、まだ「省略歌詞」を正確に
調べていないので今は触れないことにする。
ついでながらこの曲の冒頭の「天文二十三
年」の天文は歴史学では「テンブン」と読む
「テンモン」と歌うことは「大正」を「タイ
セイ」と歌うようなものであるが、これは少
し重箱の隅をほじくることにならうか。

暑中御見舞

吟詠 赤心流
琵琶 赤心流

家元

赤心流 鶴翁

〒420 静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四二(五三)一四七一 番



舞見御中署

<p>〒042 函館市湯川町三二四三番 電話(五九)二四七五</p> <p>高橋 蘇水</p>	<p>〒580 松原市柴垣三三三番 電話〇七二二三(三三)一九〇七</p> <p>中山 鳳水</p>	<p>〒164 東京都中野区本町三ノ二 電話〇三(三七五)一八四七</p> <p>仲川 秀邦 (旭朋)</p>	<p>〒606 京都市左京区下鴨藪倉町一六 電話〇七五(七八一)三〇五〇</p> <p>馬場 鴨水</p>
<p>〒464 九ノ一二 教室名古屋千種区高見町一ノ</p> <p>〒454 中古屋市中川区中島新町 電話〇五二(三三三)〇二八四</p> <p>阿部 秋子</p>	<p>〒171 東京都豊島区高松三ノ一二 電話〇三(九五五)三六四五</p> <p>法汪山 藤卷 旭鴻</p>		
<p>一水会神戸支部</p> <p>賛助会員</p> <p>詩吟部</p> <p>理事 女流</p> <p>副支部長 楊三浦</p> <p>支部長 佐藤光司郎</p> <p>顧問 藤浦蓮</p> <p>神戸支部長 三浦蓮水</p> <p>連水会長 楊三浦</p> <p>副支部長 楊三浦</p> <p>支部長 佐藤光司郎</p> <p>顧問 藤浦蓮</p> <p>事務所 三浦蓮水 電話〇七五(七八一)三〇五〇番</p> <p>女流</p> <p>津小沢村 楊高田木村吉川生田反</p> <p>雲池谷上 沢原中宮上山田上島川町</p> <p>ト多啓紀光花柳珠梅湧瞳秋琵華蘭紫</p> <p>キ鶴代</p> <p>ヨ子子美子水水水水水水水水水水</p>			

舞見御中署

<p>〒790 松山市立花三丁目三八八七番 電話〇八九九(四一)三八八七</p> <p>佐藤 晃絃</p> <p>日本琵琶楽協会参与 愛媛琵琶連盟顧問</p>	<p>〒671-20 姫路市花田町高木一八ノ四 電話〇七九二(二三)七一九五</p> <p>北中 旭蝶</p> <p>大阪中央部旭会</p>	<p>〒658 神戸市東灘区御影中町一ノ一 電話〇七八(八五一)二二六三</p> <p>田中 敷水</p> <p>錦心流琵琶一水会 琵琶を楽しむ会</p>	<p>〒535 大阪市旭区中宮四ノ一二ノ一四 電話〇六(九五二)九二九四</p> <p>会長 塩谷 旭洲</p> <p>筑前琵琶大阪中央部旭会</p>
<p>〒580 松原市柴垣一ノ一九ノ二七 電話〇七二三(三三)一一九〇</p> <p>一水会大阪支部 会員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>	<p>〒606 京都市左京区下鴨藪倉町一六 電話〇七五(七八一)三〇五〇</p> <p>一水会京都支部 会員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>		
<p>京都琵琶協会</p> <p>会長 平井春嶺</p> <p>賛助会員</p> <p>福山高楊 水桜岸木荒牧山安矢梅植田楊戸西林林馬</p> <p>島田橋 内井本下木 岡住吹原村中 倉川田 場</p> <p>弥明正光 媿旭港皇旭南旭旭旭旭冥歎嶽旭磯旭旭鴨</p> <p>生嶺雄子 水富水水媛水清康津濤水水水嶺水城萌水</p> <p>〒603 京都市北区平野宮西町六四 電話〇七五(四六二)一四二三番</p>			

舞見御中 暑

〒617 京都府向日市西向日鷄冠山端
電話〇七五(九二)四五二番
筑前琵琶旭会
京都琵琶協副会長
大師範 梅原旭濤

〒604 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一
電話〇七五(八四一)二九八九番
京都琵琶協会
京都秋声会
一水会京都支部
牧 秋静
(南水)

〒570 会主 大阪・吟水会
守口市緑町十七土居団地十一番
電話〇六(九九二)五六二五番
小川吟水
小金西寄甫水
梶西寄甫水
北寄村田川田
増村田川田
関村田川田
桜田川田
吟水会

〒601 京都市南区吉祥院中島町三〇
電話〇七五(六九一)〇二八番
琵琶三美会
會長 矢吹旭美津
篠原寺村井中
一坊旭旭旭旭
外原寺村井中
門旭旭旭旭
人旭旭旭旭
一同洋清富富水

〒678 相生市相生二一四一七
電話〇七九(一一)五一一八番
師範 浜本旭好

〒653 神戸市長田区梅ヶ香町一丁目十五番
電話〇七八(六七二)〇一八番
大師範 田中旭昇
筑前琵琶日本旭会

舞見御中 暑

〒662 西宮市松園町十三番二十一号
電話〇七九八(二二)八二〇八番
琵琶一水会神戸副支部長
琵琶蓮水会副会長
楊 楊 嶽 光 子水

〒603 京都市北区平野宮西町六四
電話〇七五(四六二)一四二三番
京都琵琶協会
日本琵琶協
同 関西支部
平井春嶺

〒810 福岡市中央区春吉二ノ八ノ二
電話〇九二(七六二)〇三三〇番
筑前琵琶嶺派
嶺 旭 蝶
青山旭子
梶野蝶惠

〒618 大阪府三島郡島本町桜井四ノ一
電話〇七五(九六一)五〇四三番
桜井旭会会長
秋元旭晨

〒150 渋谷区渋谷一ノ六ノ四
電話〇三(四〇七)〇〇七〇番
副理事長 荒川洲帆
理事長 桑名洲聖
港区白金一十二番
電話〇三(四四二)三六一七番

〒156 世田谷区八幡山二一〇番
電話〇三(三二九)三五五〇番
家元 大館美江子
洲楓会本部

舞見御中 暑

<p>〒011 秋田支部長 星野 耀水</p> <p>電話〇一八八(四六)三三三四番</p>	<p>〒120 錦心流 水会城東支部相談役前支部長 松本 諸水</p> <p>電話〇三(八四〇)三八九二番</p>	<p>〒606 筑前琵琶橋会 法香 久院 荒木 旭媛</p> <p>電話〇七五(七七)四〇一六番</p>	<p>〒238 横須賀四絃富士会 理事長 土橋 虎水</p> <p>電話〇四六八(二二)三六一番</p>
<p>〒336 浦和市別所四丁目一ノ九五 電話〇四八八(六二)八〇一九番</p> <p>花俣 圭水</p>	<p>〒602 京都市上京区榎木町堀川東入 電話〇七五(一一)四〇三三番</p> <p>中島 旭穂 旭穂会会員一同</p>		
<p>〒544 大阪市生野区小路二ノ二六上五 電話〇六(七五三)〇〇三二五番 電話〇六(七五二)〇六六七番</p> <p>高千穂 旭楓</p>	<p>〒537 大阪市東成区神路三ノ八ノ十八 電話〇六(九八二)二七七八番 電話〇六(九七二)二七七八番</p> <p>榊本 旭風 筑前琵琶日本旭会</p>		

舞見御中 暑

<p>〒830 天嶺 薩摩琵琶 島津 正</p> <p>久留米市国分町一五三番四 電話〇九四二(二二)八八五八番</p>	<p>〒914 岸本港水 敦賀市津内一三二番二 電話〇七七〇(二二)一一一六番</p>	<p>〒522 西川 磯水 彦根市芹橋一三二番六 電話〇七四九(二三)六七五九番</p>	<p>〒369-12 大井 錦淀 埼玉県大里郡寄居町大字寄居 電話〇四八五(八一)一七四〇番</p>
<p>〒194-01 東京都町田市金井町二六一番三 電話〇四二七(三四)一一八八番</p> <p>翠琵琶宗家 竹下 翠風</p>	<p>〒274 船橋市高根台四丁目十五ノ四 電話〇四七四(六六)七九四〇番</p> <p>錦秀 木原 綾子 錦 びわ</p>		
<p>〒651 神戸市中央区上筒井五ノ四ノ二 電話〇七八(二二)一一六一番</p> <p>上原 まり (旭艶)</p>	<p>旭会総師範 柴田 旭堂 筑前琵琶旭堂会</p>		

舞見御中

<p>〒670 姫路市田寺池の内八四二ノ八 電話〇七九二(九六)三八四四番</p> <p>大師範 法萩山 西川旭操 門人一同</p> <p>筑前琵琶 日本旭会理事 関西連合会副会長 宗家副参司</p>	<p>〒211 川崎市中原区丸子通一六六〇 シャルルム新九子六〇三番 電話〇四四(四三三)四九七一</p> <p>押川旭葉</p> <p>筑前琵琶橋会</p>
<p>〒160 東京都新宿区三栄町十五番六 電話〇三(三五二)四五九二</p> <p>筑前琵琶 紅</p> <p>押田旭窈</p>	<p>日本旭会</p> <p>範司</p>
<p>〒176 東京都練馬区旭町三一二二四 電話〇三(九三〇)四四九八番</p> <p>宗家水藤五朗 桜子</p> <p>錦琵琶本部</p>	

舞見御中

<p>〒359 所沢市中新井二ノ二八二ノ四 電話〇四二九(四三三)〇九二八番</p> <p>岡部錦蝶</p> <p>薩摩琵琶 正絃会四明会 会員</p>	<p>〒608 京都市北区上御霊上江町二三二 電話〇七五(四四一)〇六〇九番</p> <p>林旭萌</p>	<p>〒420 静岡市丸山町八七</p> <p>武田恒水</p>	<p>〒113 東京都文京区根津二ノ十五ノ二 電話(八二二)五七〇八番</p> <p>家元都錦穂 会員一同</p> <p>都派琵琶</p>
<p>〒431-31 浜松市積志町一八三一 電話〇五三四(三四)〇八七一</p> <p>晃陽小野鶴彦</p> <p>薩摩琵琶鶴絃会々々長 浜松琵琶楽協会々々長</p>		<p>〒189 東京都東村山市美住町一ノ四 久米川公団九ノ二〇四 電話〇四二三(九一)九三二二番</p> <p>大師範 若宮旭登 旭登会員一同</p> <p>筑前琵琶日本旭会 吟詠扶桑流桂水</p>	
<p>〒569 高槻市宮田町一ノ六ノ五 電話〇七二六(九三三)三一五九番</p> <p>山崎光椽</p> <p>大和流琵琶吟家元</p>		<p>山崎旭萃</p> <p>筑前琵琶橋会宗範</p>	

平家の栄華と都落(七)

ばくすい



そのうちに、北陸の風雲急を告げてきた、木曾義仲が攻め上って来たのである。

義仲は源義朝の弟義賢の子で、頼朝や義経の従兄弟(いとこ)に当る。二歳の時に父は甥(おい)悪源太義平に殺され、義仲も危うかったのを齊藤別当実盛がかくまわって、信濃の木曾へ送り中原兼遠に保護を頼んでくれた。成長するにつれて、源氏の衰微をなげき平家の専横を憤っていたが、治承四年高倉宮(たかくらみや)仁王の令旨を頂くに及んで、喜び兵を挙げた。信濃・甲斐・上野・下野の源氏を率い、進んで越後に入り、破竹の勢いで北陸道を進撃した。

平家は清盛の嫡孫維盛を大將軍としてこれを迎え討つ。維盛は、富士川で水鳥の羽ばたきに驚いて逃げ帰った人であるが、何分にも一門の嫡流であるからこれを盛り立てて大將軍とし、通盛・経正・忠度・知度らを副將軍として之を輔け、その勢およそ四万余騎、越前・加賀を平定し、進んで越中へ入らんとし、寿永二年(一一八三)五月、礪波山の決戦となった。義仲は五千余騎の兵を以て之に對

し、殊更矢軍(やいくさ)に日を暮らし、日没を待って搦手の兵、敵のうしろに廻ってとまきの声をあげる。平家が驚いている間に大手の源氏勢が攻め立てる。平家物語は――
(源氏の大軍)おめく声に、山も河も、只一度に崩るとこそ聞えけれ。(中略)平家の大勢、うしろの俱梨迦羅が谷へ、我先きにとぞ落ち行きける。(中略)親落せば子も落し、兄落せば弟も落し、主落せば家の子郎等も続きけり。馬には人、人には馬落ち重なり落ち重なり、さばかり深き谷一つを、平家の勢七万余騎にてぞ埋めたりける。

平家の侍大将忠綱・景高・秀國らもこの谷の底に埋もれて亡くなったという。平家は、やむを得ず退いて加賀の国藤原に陣を敷けば義仲進んでこれを攻める。平家再び敗れて落ち行く中に、踏み留どまって只一騎防ぎ戦う勇士あり、赤地の錦の直垂に萌黄威の鎧着て鍬形打ちたる甲の緒をしめ、黄金づくりの太刀を佩き連銭芦毛の馬に金覆輪の鞍置いて乗るを見れば、身分の高い人と思われが、続く家来もない。手塚の太郎が「名乗らせ給え」と云えば、「存ずる旨あれば名乗るまじ」と云って抵抗し、遂に手塚に討たれる。義仲はその首を見て齊藤別当であろうと思つたが、それにしては髭の黒いのが不思議なりとして洗わせたら白髪になった。実盛はこれを最後

の戦と覚悟して、宗盛に乞うて特に錦の直垂を許され、髭を染めて年若く装った。名乗れば義仲にとっては大切な恩人とわかるから、源氏の方では助けようとするかも知れないと思ひ名乗らなかつたので、義仲主従はこれを知って深く悲しみ涙を流した。

平家は大敗して京へ引きあげる。四万余騎中、鎧を着し兜をかぶっているのは僅か四、五騎だけで、その他の者は皆武装を棄てて逃げた。木曾義仲は追撃して京に迫る。四方の源氏一斉に起つとの噂で京は不安のどん底に陥入り、寿永二年七月二十五日、平家は遂に都を捨てた。六波羅、西八條、臺を並べた邸宅は総て火をかけて灰燼とし、煙の立ちこめる中を同族すべて京を去り、そして二度と帰ることとはなかつたのである。

明くれば七月二十五日なり。漢天すでに開きて東雲嶺にたなびき、あけがたの月白く冴えて鶉鳴又いそがはし。夢にだにかかるとは見ず。一とせ都うつりとして、俄かにあはただしかりしは、かかるとは見ず。表とも今こそ思ひ知られけれ。(平家物語) 平家は、ひとり都を落ちたばかりでなく、福原にも只一夜を過ぎただけで、翌日にはここにも火を放って立ち去つた。

春は花見の岡の御所、秋は月見の浜の御所、泉殿、松蔭殿、馬場殿、二階のさじき殿、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども。清盛入道が栄華のあととて悉く灰になつた。平家はそれより船で西海の波に浮かんで遂に都落ちをしたのである。

昨日は東関の麓に響を並べて十万余騎、今日は西海の波の上に響を解きて七千余人、雲海茫茫として青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てて月海上に泛べり。極浦の波を分け汐に引かれて行く船は、半天の雲に廻る。日数経れば都は山川程を隔てて、雲井のよそにぞなりにける。遙々来ぬと思へども、唯尽きせぬものは涙なり。(平家物語)。(終り)



ハワイで 琵琶楽の講演・演奏

ハワイ大学から招待を受け六月十九日空路東京出発。二十三日東西文化センターで「琵琶の歴史と音楽」と題して講演、二十五日は放送局で琵琶ラヂオ放送、二十六日オルヴィス音楽堂に於ける「琵琶と尺八の夕べ」には

The Japanese Biwa and Song GORO SUTO, head of the Nishiki School of Biwa SHINICHIRO MAKIHARA, Shaktachi

の標題で三ページに亘る英文解説付プログラムにより「耳なし芳一・屋島回顧」の二曲を演奏(尺八は牧原新一郎氏)して二十九日帰國したが、ハワイ大学の日本音楽を含む東洋音楽、文化の研究の深さと熱意は驚くばかり

で、二十六日夜八時からの演奏会には三百人の聴客が熱心に聴いて下さつた。因みに亡母錦藤がアメリカ演奏からの帰途ハワイで演奏をしたのが昭和三十七年六月で奇しくも二十年後の同じ六月が私の演奏となった。(水藤五郎氏からの通信要訳一係)

塚大鳥大社で献奏琵琶會

六月十三日(日)同神社花菖蒲祭りに大阪琵琶同好会の協賛で午後一時から参集殿で琵琶献奏、終日参詣者で賑わつた。吉野山懐古一藤原湖渡り一多和衣川一寛旭童一院の庄一王旭林一石童丸一矢野旭信一岩壁の母一小林旭滄一姫百合の塔一島津、米原一秋風故郷の山一辻旭城一羅生門一石橋旭嶺一戦艦大和田中敷水一坂崎出羽守一中島旭穂。外に扇舞詩吟、民謡、奇術等献番。

名古屋秋声会のゆかた会

六月二十日(日)名古屋千種区の山王会館で開催。阿部秋子をはじめ男女会員教氏の外京都牧秋静、彦根西川磯水、静岡武田恒水、名古屋丹野鮎水、同糸井澄水ら列席、なごやかな半日を送つた。(敬称略)

京都琵琶協会の六月例会

六月二十七日(日)午後二時本部平井会長宅。

(出席者)馬場鴨水、西川磯水、楊嶽水、田中敷水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、桜井旭富、岸本港水、水内煥水、平井春嶺、植村寛水、賛助会員高橋正雄、福島弥生の十六氏。教氏研修演奏のあと七月二十三日祇園八坂神社献奏会及び十月十六日京都商工会議所に於て開催の秋季演奏会の各自出演曲目の選定や、七月十六・十七日須磨荘一泊懇親旅行の打合せなどをして小宴を開き七時過ぎ散会した。

遠参琵琶交歓演奏会

六月二十七日(日)午前十時静岡県新居町浜名湖厚生会館、薩摩琵琶絃会・一水会豊橋支部共催。(豊橋)月下の陣一鈴木一壇の浦一洲淵一城山一脇一井伊大老一小林一新選組一青木呈水一屋島の營一田中園水一高源吾一齊藤梅水一戦艦大和一小川清水一竜の口一山本宝水一小栗栖一小林典水一敦盛一石黒石水一西郷隆盛一吉見輝水一花の若武者一菅沼穰水一坂崎出羽守一田中訴水(浜松)噫宗良親王一伊藤外四人一浜名湖廻り一若竹外一敦盛一富永外三人一思川一芥川外五人一六義人一村上一小松の操一大場暁惶一花紅葉一川口曉江一白虎隊一鈴木輝一錦の御旗一竹原輝一彰義隊一石川輝一俊寛一青島鶴一足柄山一白石鶴一小敦盛一染谷鶴一決戦三方ヶ原一伊藤鶴一蒙古来一三上鶴一酒井の太鼓一柿沢篤一片見の桜一小野鶴彦(来賓)安宅一清水旭城一吉野落(日)